

# 求道者の文学という

こと

川副国基

なくなつた伊藤整さんには、詩人・小説家・評論家・翻訳家としての多面さがあった。伊藤さんはその多面さの、それぞれの面で意義のある仕事をしてきた人であつたが、戦後、わたしたちは、特にその評論に大きな啓示をうけてきた。

蒼白というような顔だったが、眼鏡の奥には、いつもなにかものを深く考えているらしい眼が柔和に光っていた。伊藤さんの名著に教えられる評論集「小説の方法」(昭和二三)と「小説の認識」(昭和三〇)とは秀抜な評論であり、近代日本文学の追究のために今後もながく研究家の指針になるであらう。最近の評論集「求道者と認識者」(昭和三七)には、近代日本文学の二つの

潮流として求道的実践者の文学と人間性認識者の文学とが提起的に考えられていて、いかにも伊藤さんらしい近代文学史観を示したものであつた。

明治十年代前半のさかんな自由民権運動に大いに自我意識をよびさまされ、ついでまた、政治家を理想的人間として描いた十年代後半の政治小説に大いに感奮して、自己を自由に發揮できる仕事としてひとたびは政治家になろうと熱心に希望した青年たち、その青年たちが、やがて二十二年の欽定憲法・皇室典範・衆議院選挙法などの発布、翌二十三年の教育勅語の渙発などから、わが国の政治の前途が逆に自由民権を圧殺するものであることを知

つてすっかり失望し、政治家になることを忌避して、つぎに求めたのが文学者としての仕事であつたということ、いいかえれば、明治の文学とはそういう政治に裏切られた青年たちの手で書かれたものであつた、というのは、この十数年来のわたしの明治文学論の序論である。

自由民権の思想から自己を自由に發揮する生きかたこそ、近代人の生きかたであると教わつた青年たちの多くは、とりたてて誇るべき学歴もなかつたのだが、そういう学歴のない者にも自由に自己が發揮できる仕事としては、もう文学の仕事以外にはなかつたのである。しかもその文学の仕事は、明治十年代半ばの当時、決して生活を保証してくれる仕事ではなかつた。商業的な出版はまださかんでなく、出版社や新聞・雑誌の数もすくなかつた。生活ができるとはきまらない仕事、いわば無償の仕事に携わるほかはないというとき、そういう人たちにはおのずから、この文学を自己修業、人間鍛錬の仕事と考える求道的な精神もおこつてきたであらうというのが、わた

しの持論なのである。

作家を求道者か認識者かのどちらかに決めてしまふことは甚だ困難なことなので、伊藤さんの「求道者と認識者」には割り切れないものが残るのだが、その求道者についての考えにはわたしの考えとはほぼ似たものがあつたのであろうと思う。

明治初年の諸改革のなかで一般庶民の豁然として道がひらけてきたという明るい希望を持たせたものは、五箇条の御誓文で誓われた庶民に至るまでのおのその志を遂げ得るということであつた。士・農・工・商の職業的な身分階級が撤廃されて、才能ある者はだれでも支配的階級にのぼれるということであつた。さればこそ、貧賤から身をおこして發達することの可能性を説いた中村敬宇訳の「西国立志編」や福澤論吉の「学問のすゝめ」がベストセラーのかたちで広汎に読まれたのであつた。

しかし、このことからまたまことに世俗的な立身出世主義の風潮をおこすこととなつた。日露戦争の直後から夏目漱石が憂

えた近代日本人の利己主義もこのあたりから胚胎したのであつた。

ところで、立身出世の道は一般庶民の世界にもひろく開放され、才ある者、努力する者にはなるほど榮達することもできるよつたが、学制がととのつてくるにつれて、支配階級にのぼる道は東京大学の出身者に直結するよつた。明治十九年に帝國大

学が創立されるまではわが国唯一の、もつとも輝かしい立身出世の道を独占した学校であつた。学歴があるということはこの東京帝國大学に学んだことがあつた。明治学院に在学中の島崎藤村は、東大進学を目標として一高を受験して失敗したのである。こんにちから思えば藤村ほどの人がなんでわざわざ一高・東大を望んだのかとおかしい気がするが、まだ文学で身を立てることも考えなかつた十八歳ごろの藤村に、東大を卒業することはそのまま島崎の家を興すことと考えられたのであつた。明治学院で藤村と同級であつた戸川秋骨は、明治学院卒業後、東大の選科に進んだ。正式の東大生とな

つたわけではなかつたが、処世上では明治学院卒業だけよりも遙かに有利であつたろう。

学歴のない者が、学歴などを問われることなく自由にその才能をのぼせるのが文学の世界であつた、といつたが、このことを具体的に示してみよう。

東京帝國大学を卒業した夏目金之助が明治三十八年、一高と東大に講師をして得た俸給は月百二十五円（年俸千五百円）であつた。同じ三十八年春まで信州小諸の小諸義塾に教鞭をとつていた明治学院卒業の学歴の藤村の月俸は最高のときで四十円ぐらしかつと推定される。明治三十九年、盛岡中学校を中退した学歴しかない石川啄木が、郷里浜民村の小学校の代用教員をした時の月俸は八円であつた。しかしこれは学歴からの月俸のちがいで、文学者としては月百二十五円の漱石、月四十円の藤村、月八円の啄木などという評価など成りたないといつてもよい。そのことをいうのであ